

【施設名】

水戸芸術館現代美術センター

【施設概要】

音楽、演劇、美術部門を擁する芸術複合文化施設として、水戸芸術館は1990年に水戸市の市制100年を記念して開館しました。水戸芸術館の設計は磯崎新氏。施設全体は、25万人の市の規模にふさわしいサイズのコンサートホール、劇場、現代美術ギャラリー、広場、100mの塔などで構成されています。(写真①)

開館当初から水戸芸術館は水戸方式といわれる独自の運営方式と、大都市型文化施設とは異なる、企画のオリジナリティを大切にしてきました。

水戸芸術館の基本理念は、下記の5つです。

- 1、新しい芸術文化を創造する。
- 2、国際的な視野にたつて芸術文化の交流を行う。
- 3、楽しみながら考える。
- 4、市民の芸術文化活動の拠点となる。
- 5、都市の活性化に寄与する。

美術部門である現代美術センターは、私たちと同時代の創造活動＝「現代美術」に焦点を絞り、上記の理念を具現化する活動を展開しています。当センターは、本来、美術館の大きな柱のひとつである作品収集ではなく、時代を映し出す企画展に力を注いでいるため、「美術館」という呼称を用いていません。約1000㎡のギャラリーは、多様な現代美術の展示を可能とするニュートラルな空間です。(写真②) 天井から外光が入る部屋、暗転できる部屋など大小の9つの部屋が連なるギャラリー構成とフレキシブルな仕様は、国内外のアーティストから高く評価され、魅力あるギャラリーとして認識されています。日本の数多くの公立美術館の中でも、水戸芸術館現代美術センターは、美術館専門館ではなく三部門のひとつでありながら、現代美術だけに特化した企画展のみで運営されている稀有な存在といえるでしょう。

【特色ある取り組み】

実験的な新しい美術の展覧会から親子で楽しめる展覧会まで、学芸員が一から作り上げるオリジナル展を中心にすえた独自の事業展開を行っています。海外の一流のアーティストの個展や国際的なグループ展など国際交流事業も推進してきましたが、近年は特に地域との連携にも力を注いでいます。

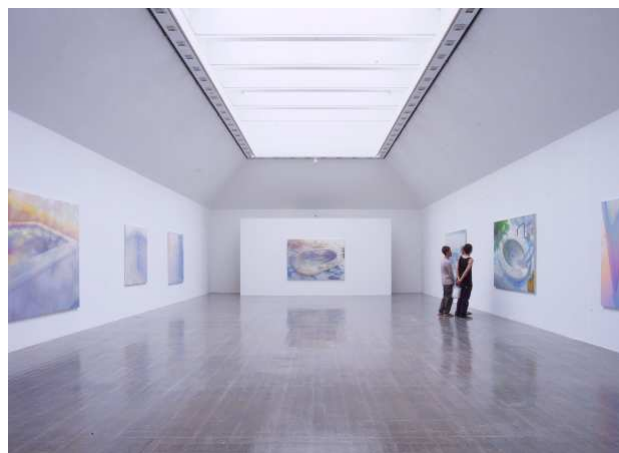
2002年と2004年に実施した展覧会「カフェ・イン・水戸」(写真③)では、商店、商工会議所、水戸青年会議所、NPO、学校、建築家や企業家と連携し、また200人を超えるボランティアの参加を得ながら、ギャラリーだけではなく、街中にも展示を広げました。さらに、展覧会の準備段階から市民参加ができる場を数多く用意した「日比野克彦の一人万博」(写真④)展や街中にグラフィティを展開した「X-Color グラフィティ in Japan」展など、地域との関わりを考慮した事業も実施しました。今年は、「佐藤卓展『日常のデザイン』」を

契機として、地元のメーカーと協働し、新しいお土産を開発するなど(写真⑤)、地域の様々な人を巻き込みながら、学芸員の企画力とアーティストの力が相乗効果を上げる試みを展開しています。

一方、夏に開催した「ライフ」展のように、同時代の表現とは何か—という普遍的な問いかけを含んだメッセージの強い展覧会も実施し、多様な来館者のニーズに対応できるように企画のバランスも心がけています。こうした広がりのある試みは、経済、環境、教育、政治など、同時代の社会状況と呼応する多様な表現に満ちている現代美術ゆえに可能といえるでしょう。

展覧会と平行して、変化に富んだ教育プログラムの実践＝高校生を対象とした特別月間「高校生ウィーク」やアーティストワークショップ、そして、ボランティア活動は、現代美術センターのもうひとつの特徴です。事業ごとのボランティア導入とは別に、現代美術センターでは、1992年から年間を通してギャラリー・トーカーによるボランティア活動を行っています。トーカーは公募・研修を経た市民で構成され、専門家（＝学芸員）と一般来館者の仲介役として、現代美術を浸透させる役割を担っています。この数年は学校や母子など、トーカーへの要請の幅も増えてきました。

水戸芸術館現代美術センターは、同時代美術の奥深さや楽しさ、そして可能性を伝えるプロフェッショナルなソフト集団として、地域への浸透と地域からの発信を目指しています。
(写真①)



(写真②)

「こもれび」展 2003年

水戸芸術館現代美術ギャラリーでの展示風景

(写真③)

椿昇+室井尚《飛蝗 (プロジェクト・インセクト・ワールド)》2001年
「カフェ・イン・水戸」2002年 水戸芸術館広場での展示風景



(写真④)

「HIBINO EXPO2005 日比野克彦の一人万博」2005年
水戸芸術館現代美術ギャラリーでの会場風景



(写真⑤)

《チョコ納豆》

佐藤卓展「日常のデザイン」2006年



【写真提供：水戸芸術館現代美術センター】